

野宿者運動と野宿生活の狭間に立ち会う ——「アクションリサーチ」と「参与観察」の対比から——

山北 輝裕 (日本大学)

1. はじめに

▶日本の野宿者支援の現在・背景

- ・ 1990年代後半から激増した日本の野宿者→2002年「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」¹以降の自立支援システムや、生活保護の受給により野宿者は減少（厚生労働省による、ホームレスの実態に関する全国調査：H.15年調査 25,296人→H.20年調査年 16,018人→H.24年調査 9,576人）。
- ・ 各自治体の自立支援センターやシェルター²だけではなく、NPOによる「中間施設」³の増加。
- ・ いっぽうで、特措法以降の強制排除（名古屋市、大阪市、東京都など）＝野宿でとどまりつづける人々の存在。「〔行政による〕野宿者の包摂は運動団体〔＝NPO〕の包摂に及んだ…〔中略〕…他方、包摂は排除を可能とした。行政は、反抗する（自立の意志の「ない」）野宿者を放置し、それを支援する運動団体を排除した」（青木 2010:97）
- ・ 支援者は野宿者の集住地区にしばしば介入し、関係性をもつ（「介入＝即支援」ではない。「支援をしない＝介入していない」でもない。「関わる」ということはある種の介入を意味する。なかでも筆者が参与した団体は平川茂（2004）が指摘する「見守り」の支援に近い：野宿状況が悪化しないように継続的に関わること）。野宿者と支援者の協同によってその場が社会運動の拠点となる。しかし一方でその場所は野宿者にとって生活の場でもある。したがって、しばしば野宿者間の「いざこざ」も…。
- ・ ここで支援者は運動と生活の狭間に立ち会うことになる。野宿者が日常生活の中で起こした「いざこざ」と運動はいかにして断絶するのか。→アメリカ、オレゴン州・ポートランド市「尊厳の村」（Mosher 2010）／大阪市 X 公園（山北 2006, 2011 など）の野宿者集住地区の

¹ ホームレスの経済的自立を支援することを第一の目的に掲げ、基本的な方針としては「働ける者」は自立支援センターへ、「働けない者」は病院等の施設・生活保護受給へ、路上にとどまる者には指導・排除というフローチャートで運用されているといえる。

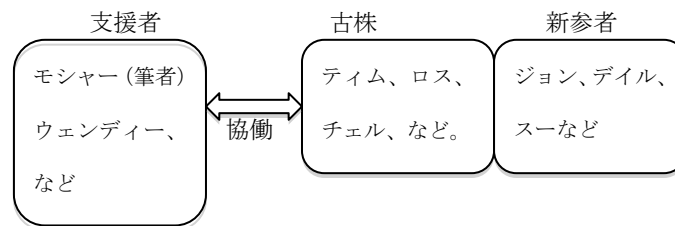
² 自立支援センターは、宿所および食事の提供、健康診断・生活相談・指導および職業相談・斡旋等により就労自立を促す。入所期間は最大6ヶ月。シェルターは緊急一時的な避難所として宿泊を提供し健康状態の悪化を防ぎ、自立を促進。入所期間は最大6ヶ月。

³ 厚生労働省 2009「社会福祉法第2条第3項に規定する無料低額宿泊事業を行う施設の状況に関する調査」において 2009年6月末で439施設、入所者14,089人。その内、生活保護受給者は12,894人。NPO法人運営は8割。

対比⁴を通して、支援(運動)の困難が学問的営為の困難につながるのかどうかを検討しつつ、話題提供したい。

2. 「尊厳の村」における「クーデター」

「尊厳の村」



▶ 「尊厳の村」

- ・ はじめて 2000 年にテントを張った数人が、ポートランド NW17 番通りへ移動し、高速道路高架下を占拠（騒音がひどく、しばしば大声でコミュニケーション）。警察・市の職員による追い出しに抵抗し、とどまり続ける。最初は 6 つのテント→80 人以上が避難することに。
- ・ 民主的な自治システムを形成する（議長・副議長・会計などの役員）。食事調理場・トイレ・資材テント・「保護」テントなどを作り疲れた人々が休むことができる場となった。

▶ モシャー（＝筆者）とアクションリサーチ⁵

- ・ モシャー（応用社会心理学を専攻する大学院生）は「尊厳の村」を『ストリートルーツ』という新聞で知る。
- ・ 2003 年頃から関わりはじめ、クアンバプロダクション（教育映像制作会社）のパートナーであるウェンディーと共に、ドキュメンタリーフィルムを作成する。制作過程には野宿住民も協働。モシャーいわく「最初、私は観察者であった」。
- ・ 映像作成＝アクションリサーチの目的としては、テント村の運動をさらに発展させるため。「尊厳の村」では、野宿住民間の「参加」の差が顕著となり（古株と新参者）、全体としても減少していた。

⁴ 対比の背景には、契機としては X 公園に「尊厳の村」の活動家が来日したこと。またアメリカの連邦政府レベルの政策としてはシェルターを基本としたマキニー法があるが、同時に「ゼロ・トレランス」も存在するように、包摂と排除が混在している状況である。したがって、日本の野宿者自立支援システムと近似していること。そうしたなかで、両者ともに野宿者の「当事者運動」を展開しているといった背景がある。対比の直接的な動機は本文で後述するように当事者のエンパワーメントと支援者の関係性が違ったかたちで鮮明になると考えたからである。

⁵ 武田丈によると、アクションリサーチとは「課題や問題を抱える組織あるいはコミュニティの当事者や問題を抱える組織あるいはコミュニティの当事者が研究者と協働して、探究、実践、そしてその評価を継続的に螺旋のように繰り返して問題解決や社会変革、さらには当事者のエンパワーメントを目指す調査研究活動」（武田 2011:49）としている。なお「協同調査（cooperative inquiry）は社会システムのなかですでにある程度エンパワーされているグループを対象に用いられることが多い。」（武田 2011:52）とされている。

▶「クーデター」のダイナミクス

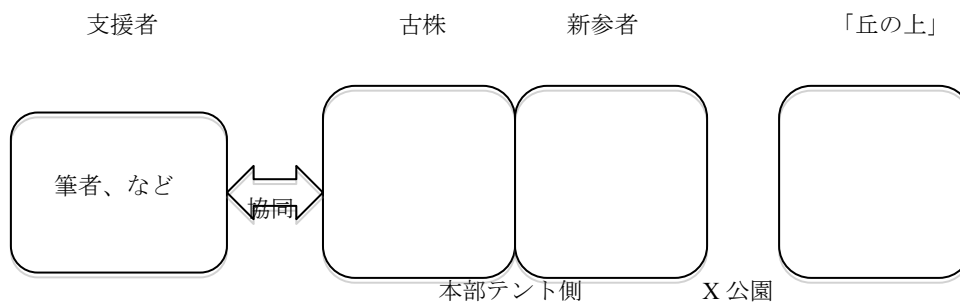
- ・ 完成した映像を村全体に向けて上映。モシヤーらの予想に反し、会場は満員。批判もなく大盛況。ある野宿者いわく「私たちは毎日ケンカしていた。…〔中略〕…衝突や不一致があるにも関わらず。私はわかった…私たちはここでは家族のようなものだ」と。
- ・ 1週間もたたないうちに、古株の3人（ティム、ロス、チェル）のうちティムが議長からおりにるように、そしてロスとチェルが村から出て行くように他の村人から迫られた。村のルールを守っていないという3回の警告を受ける（ティムは議長としての仕事を記録するタイムカードの不記載を理由に、出て行くか議長をおりるかを迫られる）。
- ・ モシヤーらは再び映像を撮る（チェルは村人が何かしてくるのを恐れていた。そしてカメラとモシヤーらの存在が自分を安全にすると考えていた）。
- ・ なかば、新参者からの脅迫のようなかたちの追い出しであったが、ティムは「彼らと論争したり、闘いたくない。それは村を破壊することになるから」と言う。
- ・ 一方、他の村人ガイいわく「村はもう〔村の内規だのルールだのとうるさい古株の〕ロスにうんざりしていた〔中略〕私たちはアウシュビッツみたいに〔村を〕見るようになった」と言う。
- ・ そうした混乱の中で、再び撮影し続けるモシヤーは新参者のジョン（古株を追い出した実行者の一人と思われる）に「完璧なエンディングが発生するのを待っているのではないか」と言われてしまう始末…。

▶モシヤーのリフレキシビティ

- ・ かつて、村の掟「86d」により一度追い出された経験がある村人のスーは、自身が警告を通知された時にウエンディー [=映像制作者] に助けを求めたが、「それはできない」と断わられてしまった。→後日、モシヤーが村に行ったところ、スーから無視され「非協力的ね」と言われてしまい、彼女はショックを受け困惑してしまう。
- ・ 今回の協働調査（撮影）において、新参者であるスーが「私が心配しているのは調査ミーティングではない。私が心配しているのはその後だ」と語るように、調査が終わった後、古株から標的にされるのを恐れていた。
- ・ そして今回の「クーデター」の一件でもモシヤーは特定の立場を示すことはなかった。しかしそれは、古株の3人が標的になっているときに、他の村人が沈黙をきめこんだのとまったく同じ構造であった。古株への警告後、スーは実質上、村の議長になっていたが、今回の排除の件は「私のせいではない」と繰り返し、困惑を示していたにも関わらず…。
- ・ モシヤーは誰よりもスーと過ごす時間が多くなれば、他の村人から「えこひいき」しているとみなされ、「間違った」側に立つと感じていた。そして他の村人と関係性を危うくしたくなかった。

- ・ 「新参加者からすれば、私は古株である〔運動の歴史を共有しているから〕…〔中略〕…しかし私はまた外部の人間でもあった。私は尊厳の村に住んでいない。投票や住人がする仕事をせず、貧困を経験していない」（Mosher 2010:55）
- ・ 村の権力のダイナミクスの変化は「リーダー」や古株の排除を経てのみ達成されるものだったのか？ これを（逆説的に）エンパワーメント⁶と言えるだろうか？ とモシャーは問う。

3. 大阪市 X 公園における「もめごと」



▶大阪市 X 公園

- ・ 2002 年頃、公園全体で 30 棟ほどの小屋が存在した。支援者と X 公園で暮らす野宿者が集う「本部テント」と呼ばれる拠点が存在した。また X 公園には「丘の上」と呼ばれる野宿の住民が存在し、彼・彼女らはあまり運動に参加することはなかった。
- ・ 襲撃防止のために輪番で夜警。「本部テント」側の住民は、夜回りや炊き出しの活動に参加することが暗黙の前提。⇔しかしその前提は完全に共有されているわけではなく、「参加」には差があり、しばしば「もめごと」の火種に。

▶私と参与観察

- ・ 当初、名古屋時代は卒論の執筆がきっかけで団体にアポイントを取り、「勉強する学生」という限りなく「グレーゾーン」に近い入り方。しかし、そんなことは野宿の当事者は知ったことではない。相談会の場に立てば、どんどん相談される。参与中にメモをとりすぎて福祉系の大学院に所属するボランティアから「参与観察中？」と言われてしまったり…。
- ・ 名古屋市では、最初は医療・福祉の面から支援する団体に入っていたが、後に夜回りへも参加。医療団体に参加している時に当事者から批判されたことや（「福祉事務所だけ付き添ってもしょうがないんや。寝てるとこ来い！」）、夜回り団体に当事者が参加していたことに衝撃を受け、夜回りとの掛け持ち（夜回りに参加する当事者から誘ってもらった）。団体間の活動理

⁶ 本報告ではエンパワーメントを「自己の状況を改善するために決定しアクションを起こすことができるようになる」といった程度の意味で使用している。

念が違うため「コウモリ」状態に…。その後、大学院進学の関係で、名古屋夜回りと関係を築いていた大阪夜回りへ（団体名は仮名）。大阪夜回りが集中的に関わっていたのが X 公園。

▶「本部テント側」における「食事問題」（2002 年頃）

- ・ 共同で飯をつくっていた時期があった。その中心であった元コックの野宿者が就職し、明日から誰が「みんな」の飯をつくるかをめぐってトラブルに。
- ・ 「寄り合い」では「交代案」に賛成する人、「自分で食っていく」という人、そもそも「調理がいやだ」という人にわかれ膠着状態に。元コックに変わって一人で作っていた男性が、その負担から怒りだし、その後この「食事問題」をきっかけに何人かの野宿者が X 公園から出て行くことに。

▶越冬における古株・新参者・そして「丘の上」

- ・ 年末年始の役所が閉まる期間に連日の炊き出しと夜回り。集中的な取り組みのなかで、新しい仲間が増える。そして、越冬期間が終わった翌日から X 公園でともに暮らすかどうかを決めてもらう。
- ・ 古株（の一部）はしばしば新参者に夜回りの回り方ひとつにしても、炊き出しの調理にしても“ガミガミ”とものを言う。
- ・ 新参者は越冬が終わって X 公園で暮らし始めると、古株と距離を置く人もではじめる。
- ・ そしてまた象徴的なのは、同じ X 公園に住む「丘の上」の住民で、彼・彼女らは日常的に顔をあわせるも、活動に参加はしない。そのことが新参者に輪をかけて不満をもたらす（「なんであいつらには支援者は何も言わないんだ」）。しかし、「丘の上」の住民に「本部テント」側の住民は仕事を手配してもらったりと関係はきわめて複雑であった。

▶私のリフレキシビティ

- ・ 「食事問題」に関して支援者と共に「寄り合い」をもつことに。支援者（私を含む）の対応も切れ味が悪い。密集して暮らしているからこそ、共同で炊事をやっていく相互扶助の側面を支援者はくみとりたい——そしてそのことは運動の理念とも一致するため。しかし「金出し合っても自分が出せなくなった時に他の人が出してくれるのかわからん」という当事者からの批判。そもそも個々の野宿者の野宿生活の領域が膨大に広がっていることを目の当たりにする。
- ・ 越冬における支援者の位置→もちろん、新参者に強くあたる古株の野宿者には注意する（しばしば自分の親や祖父の年齢のような人たちに：モシャーとは違い明確に注意する）。一方で参加しない野宿者に「当事者なのだから立ちあがれ！」などと強く言えない。
- ・ 「食事問題」、「越冬の古株問題」にしる、これらはすべて「仲間」（支援する側／される側を乗り越えて。仲間の命は仲間が守る）という理念のもとに「寄り合い」が行われてきた。そ

のため支援者からすればプロセスはふんだつもり→しかし、こうした支援者の介入をふまえた場合、当事者の活動はほんとうにエンパワーメントの単純な現れとしてしまえるのか？

4. おわりに——対比から見たもの／学問的営為との連続性

- ・ あらかじめ調査目的を設定し協同的な「アクションリサーチ」をとったモシャーにしても、参加するなかで現場の問題を発見していくタイプの「参与観察」をはじめた筆者にしても、「支援者／研究者」と容易に分けることのできない関わりをする以上、多かれ少なかれ、野宿者から「支援者」として迫られる「選択」とでもいうべき局面を迎える。当然、リフレキシビティも両側面が混在する観点から同時に行わざるをえない。
- ・ エンパワーメントの発露をめぐる問題提起の差異への着目は、「結果とプロセス」について考察することにもなるだろう。すなわち、「尊厳の村」のプロセスは新参者が古株を脅迫的に追い出したが、（その間モシャーは「介入していない」）結果は「よかった」とされている。X公園の場合、結果も明確に「よかった」とは言えず、プロセスも支援者がなかば介入するかたちとなっている。さもすればそれは支援者による監視にもなる。エンパワーメントをめぐって、結果とプロセスのどちらに重きをおくのかは容易に決めることができないがゆえに、「当事者主体の支援」の多様性がテーマとして浮上する。
- ・ ただし、（調査者としても支援者としても）モシャーが調査の途中抱いていた「中立の立場」（すべての人から信頼され、いずれかの立場に立たず論争にも加担しない）はフィールドにおいて存在せず、ナイーブすぎる。そもそも関わるという事自体がある種のシークエンスをもたらしていくのだから。しばしばあらゆる「人道支援」で言及されるように、中立を保ち紛争当事者の非人道的行為を批判しないことが、現状を存続させることにつながるため、それが果たしていいのかという問題も生じる。
- ・ 一方で、どの立場をとればいいのか困惑するのも事実。筆者の場合、「仲間」という理念は重要だと思い至りテーマにしようと試みたが、実際に遡上にのせようとするといわゆる「多元的現実」の世界。彼らの愚痴をストレートに書けないし、そもそも現場で誰の立場をとればいいのかわからなくなる。→学問的営為としては、「ドン・キホーテとサンチョのやりとり」のごとく、お互いがお互いの世界を保ちながら物事が進んでいくことに着目…。
- ・ 野宿自体が生活であると同時に運動でもあるがゆえに、野宿者の野宿生活の論理が突出し（「尊厳の村」であれば新参者のドラッグ解禁と、古株の村規則遵守の対立が。X公園であれば個々の食事と相互扶助が。あるいは参加格差（＝まったく参加しない人との差を問題にした当事者）と参加者の上下関係（＝運動に参加している人だけを問題にした支援者）など）、その野宿生活に支援者が運動の論理をフィットさせることができなくなったときに狭間が生成する。困難をめぐっての現場における人々の視点の違い＝学問と現場の対話開始→現場に還元していくとい

う対話的循環関係が、「<支援>のフィールドワーク」のひとつの方途になるのではないか。

	野宿者像	主な問題	主な活動	主な対象	対野宿	自立像	対行政
運動1	労働者	失業	反失業	現役	否定	就労による脱野宿	対抗／提携
運動2	生活者	貧困	反貧困	高齢	否定	福祉による脱野宿	提携／対抗
運動3	ムラ人	排除	反排除	定着	肯定	尊厳ある野宿	対抗

【図1】現代日本の野宿者運動の類型化（青木 2010 より作成）

運動1：寄せ場で日雇労働運動をしてきた運動団体。マルクス主義の傾向。

運動2：野宿者援護を行う運動団体（ボランティア団体）。福祉主義が中心。

運動3：公園でムラ作りをめざす団体。アナーキズムの傾向。

参考文献

青木秀男,2011,「権力と社会運動——野宿者運動の問い」『理論と動態』3:87-106.

Cress, Daniel M. & Snow, David A., 1996, “Mobilization at the Margins: Resources, Benefactors, and the Viability of Homeless Social Movement Organizations,” *American Sociological Review*, 61:1089-1109.

DOORWAYS to DIGNITY, 2012, (2012年5月22日取得 <http://www.doorwaystodignity.org/>) .

平川茂, 2004, 「『路上の権利』と『見守りの支援』——野宿生活者中の<逃避>タイプのニーズ（必要）をめぐって」『市大社会学』5:53-67.

記録集編集委員会編, 2007, 『それでもつながりはつづく——長居公園テント村行政代執行の記録』ビレッジプレス.

小玉徹・中村健吾・都留民子・平川茂編著, 2003, 『欧米のホームレス問題——実態と政策』法律文化社.

小久保哲郎・安永一郎編, 2010, 『すぐそこにある貧困——かき消される野宿者の尊厳』法律文化社.

Mosher, Heather I., 2010, “Issues of Power in Collaborative Research with Dignity Village,” *Cultural Studies⇌Critical Methodologies*, 10(1)43-56.

武田丈, 2005, 「PLA (Participatory Learning & Action) によるマイノリティ研究の可能性——人類の幸福のための社会『調査』から『アクション』へ」『先端社会研究』3:163-207.

——, 2011, 「ソーシャルワークとアクションリサーチ」『ソーシャルワーク研究』37(1):46-51.

Wagner, David & Cohen, Marcia B., 1991, “The Power of People: Homeless Protesters in the Aftermath of Social Movement Participation,” *Social Problems*, 38(4)543-561.

山北輝裕, 2006, 「野宿生活における仲間というコミュニケーション」『社会学評論』57(3):582-599.

- , 2010, 「路上につどう人々——『当事者運動』と野宿生活の狭間」『解放社会学研究』22:12-30.
- , 2010, 「野宿者と支援者の協同——『見守り』の懊悩の超克に向けて」青木秀男編著『ホームレス・スタディーズ——排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房, 262-284.
- , 2011, 『はじめての参与観察——現場と私をつなぐ社会学』ナカニシヤ出版.